
思春期の鱗

佐久間隆一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期の鱗

【Nコード】

N2994B

【作者名】

佐久間隆一

【あらすじ】

ある日、鱗が生えるようになった少年の話。

ぞり ぞり ぞり ぞり

ぞり ぞり ぞり

ざり

十一歳の或る春の日を境に、少年——蜥蜴は、毎日夜八時から一時間、風呂場に籠るようになった。

蜥蜴の母は「綺麗好きになったのね」と、少年が身なりに気を配る年齢に成ったことに感心し、「でも一時間は凝り過ぎ」と笑った。

蜥蜴の父は「色気づきやがって」とだけ言い、母に咎められた。

蜥蜴は何も知らない両親を見て、安心する。だが、同時に家族が、一つ屋根の下に暮らしながらも、自分の身体の変化に気づかないことに、苛立ちにも似た寂しさを覚える。

蜥蜴は考える。

つくづく、両親は幸せそうだ。

悩みがなさそうだ。

悩みがないなんてことは実際には有り得ないのかもしれないけど、自分の見る限り、両親に差し迫ったものは無いように思われる。

きっと、悩みは無いほうがよいだろう。

これからも無いほうがいいに決まっている。

だから、自分の悩みは、一生後回ししよう。

そう考え、黙っている。

だが、反面、いつか告白せねばならない時が来るかもしれない、いやきつと来るだろうとも思っている。

その時は、どう切り出すか。

蜥蜴は考える。

例えばこんなのはどうだろう。

出だしはさりげないほうが良いかもしれない。

母さん、父さん。

最近、体から鱗が生えるんだ。

……うん。

口が裂けてもそんな事は言い出せそうにない。

少なくともまだ。

少なくとも自分からは。

◇ ◇ ◇ ◇

風呂に入るとき、蜥蜴は必ず、爪切りを持ち込むようにしている。鱗の処理に必要なからだ。

鱗は、肩甲骨から始まり、二の腕、脇、胸、腹はへその辺りまで。肘、甲、指先、という具合に、上半身と手の末端まで生える。指先の鱗が一番硬く、他の鱗が胼胝^{たこ}程度の硬さだとするなら、爪くらいの硬さがある。

見た目は肌色、皮膚となら変わりなく見える。一枚の大きさは米粒大か、それより少し大きい位。それがびっしりと行儀良く肌に敷かれている。

それを切る、というよりは削ぎ落とすのに爪きりが必要だった。背中の鱗は比較的柔らかいので、垢すりで強く擦るうちにとれる。だが、指先の鱗はそうはいかないので爪切りを使用する。鋏の部分より、やすりの部分を多用することが多かった。軽石で剃った方が効率は良いし、気分もいいのだが、何分消耗が激しいのでばれる危

険があった。

蜥蜴の鱗の下には、普通の人間と特別変わらない皮膚がある。強いて違いを言うならば、かさぶたが取れてすぐ、完治したばかりの肌の、薄いピンクに近い色をしている。

蜥蜴は、毎日毎日、欠かさず鱗を剃った。

背中の鱗まで、一枚も欠かさずに剃った。

自分が蜥蜴だとばれた時の、社会が自分を観る目が怖かったのも勿論あるが、むしろそれより、鱗の下に隠れる、そのピンクを見るために毎日鱗を剃った。

それは本能のようなものだった。

魚が水を思うように。

水が魚を思うように。

ただ触れ合うため、確かめ合うために、蜥蜴は自らの鱗の下の皮膚を剥き出しにした。

毎日毎日代わりの鱗が生える。

爪は一週間に一度切れればいいが、鱗は毎日、同じ硬さで生えてきた。

剃るたび、生え代わる度に、蜥蜴は自分が異常である、常軌を逸していると感じる。

そしてコーナーを無事曲がりきれなかったレーシングカーと、そのレーサーを自分に重ねて連想する。

蜥蜴は考える。

母さんも、父さんも、普通の人間なのに、自分だけ何故、こんななのか。

突然変異なのか、一生こうなのか、それとも時期的なものなのか。自分だけなのか、他の人も悩んでいる事なのか、もしかしたら誰

もが誰も、鱗は生えてくる物なのだろうか。

もし、他の、自分以外の蜥蜴人間が公になったら、彼、あるいは彼女は、どういう扱いを受けるだろうか。

実験動物？ 新たな人類？ 動物園行きにでもなるのか。奇病の扱いを受けるのか。

もし僕以外に居るとしたら、彼らは鱗を隠しながらどうやってうまく生きているのか。

そもそも、生きていけるのか。

分からない。

分からない。

蜥蜴は考える。

分からない。

誰かに、相談する事も考えないではなかった。両親とか、医者とか、何とかできそうな人たちに。

独りで悩んではいけない、とは分かっている。

でも、何故かは分からないが――だが少なくとも動物的な生存本能などではなく――、これは自分ひとりで決着をつけなくてはいいけない問題だと感じていた。

人に相談するような悩みではないと思っていた。

そして今日も蜥蜴は鱗を剃る。

無言で蜥蜴は、鱗を剃り続ける。

ぞり ぞり ぞり ぞり

ぞり ぞり ぞり ぞり

ざり

背中の鱗に移る。爪切りを垢すりに持ち替える。

さりさりさりさり

さりさりさりさり

さりさりさり

さりさり

しゅっ

剃り終えて、蜥蜴はほんの気まぐれに、湯気越しの六〇ワットの白熱灯に手を翳した。

無論、掌が光を透くわけでもない。

そこには鱗を剃ったばかりのピンクに輝く人間の手があるだけである。

人間の証明たる、指先の血流を感じる、変温動物にはない、温かな血を感じる、そんな指先があるだけである。

蜥蜴はそれに満足した。

鱗が生える理由なんて、一生分からなくても良いとさえ思えるほど満足した。

そして、剃った鱗を、詰まったりしないように、少しずつ排水溝に流して、綺麗にした。

最後に、風呂に浸かって百だけ数えて上がった。



「上がった」

「そうか」

先に風呂に入った父は腰にバスタオルを巻きつけただけの格好で冷たく冷やしたビールを飲んでいた。

自分の分のカルピスも、冷やして入れておいてくれたらしい。

蜥蜴はちゃんと寝間着に着替えてから椅子に座った。

後ろからくる、扇風機の風は、鱗を取り払った後は肌寒いほどだった。

しばらく後、不意に、テレビの野球観戦をしていた父が、「お前と呼んだ。」

「うん？」

父はいつも最低限のことしか言わないのだが、

「その、何だ」

父にしては珍しく言いよどむ。

言い出しにくそうに、もごもごと口の中で何度か言葉を転がした後、

「そろそろ、生える頃か？」

と、言う。

思考がほんの一瞬、弾けて飛んだ。

蜥蜴は考える。

鱗のことだろうか。

しばし考え、

「うん、生えた」

とだけ答える。

「お前も男の子だからな」

鱗は男だと生えるものなのだろうか。

父にもそんな時期があったのだろうか。

いろいろ聞きたくはあったが、それを押し殺して別の質問を、父にする。

「父さんも生えたときショックだった？」

「ああ」

「時期的なものなのかな」

「いや」

「一生生えるのかな」

「ああ」

「……」

「……」

しばらく黙ると、「そうか」と父は一人で頷いた。
何が？ と問う目で見ると。

「ごめんな」

と、それだけ言った。

そう言ったきり、父は腕の辺りをざりざりと掻いて、黙った。

それは、七月の初め、まだ夜は肌寒い、夏の話だ。

余談ではあるが、蜥蜴少年はやがて青年になり、人に紛れ、人並みに恋愛し、人並みに幸せだったらしい。

ただ、結婚はしなかったそうだ。

(終)

(後書き)

はじめまして、佐久間と申します。

この小説は、習作＋投稿のテスト、とでも受け取ってください。
読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2994b/>

思春期の鱗

2010年11月30日03時08分発行